

俳句雜誌

空

空  
令和元年11月30日発行  
第17巻2号  
通巻第87号



2019・10・11

**SORA** 87号

福岡 永淵 恵子

朝涼や物音のなき塗師の町

分業の工房長屋麻のれん

工房は漆の匂ひ土用あい

金箔を吹いて伸ばせる涼しさよ

朝市果つ灼けしテントを巻きこんで

長崎 坂口 晴子

流灯や浦上川は灯の帯に

花柄の忘れ杖ある平和祭

長崎忌丘のあちこち灯の点る

パイプ椅子端から埋まる平和祭

何となく遠出つつしむ浦上忌

福岡 秋津 令

光より飛び出でて来る日焼の子

恂々と菊重ねゆく八月よ

ごきぶりを危めし猫と夜は寝る

かき氷食べて忘るる怒りかな

とりどりの冷酒を試すひとりの夜

岡垣 田中とし江

鳩の子の親の水輪に入りにつけり

水広きところへ鳩が子を連れて

街道や機織る音のして涼し

シャンデリア映すロビーの作り滝

川床料理和泉式部の話など

長崎 仲里 奈央

青梅や些細なことに傷つきて

はぐれてもゆつくり歩む菖蒲園

梅雨に入る六たす三で躓く子

七歳の最良の日や朝の虹

会へばまた恋してしまふソーダ水

太宰府 山本 則男

人よりも飾られてをり祭牛

かき氷最初の匙の入れどころ

墓になほ兵の階級灼けてをり

遠泳の水を脱ぎ捨て上がり来し

被爆地のどこを踏んでも灼けてをり

京都 天谷 翔子

万緑や拾へばほろと骨崩れ

水打つて玉砂利ひとつひとつ映ゆ

貸したきにハンカチーフに染みひとつ

さつきから考へてあるらしき蟻

うすものに仕立てあげたき蛇の衣

粕屋 吉田 菫

一升瓶回し飲みして神輿発つ

瓦一枚落して曲る大蛇山車

放蕩を尽くしたるごと祭果つ

帰省せし兄の鞆の重さかな

枇杷をもぐ鶏小屋に足をかけ

北九州 河原敬子

白蓮の外の花びらうすみどり

池おほふ勢ひとなりぬ布袋草

獣めく新樹の森のうねりかな

涼しさや小川は草に埋もれて

蜂の巣のいびつに太りゆく大暑

粕屋 秋 千 晴

ねぢり花人さし指でたどりたり

野球帽の鏝擦れてをり日焼の子

まだ象に揺られてゐたる昼寝覚

観客の団扇の止まる大相撲

放生会何か買ひたくなる子供

糸島 小林朱夏

参勤交代のごとく帰省せり

踊り髪ほどきて母に戻りけり

どこまでも付いていきまし赤とんぼ

麻酔医の薄き唇曼珠沙華

蝸や合せ鏡で探す傷

兵庫 青木朋子

紫陽花にはさまれてゐる地藏堂

木曾川に沿ふ山並や夏の霧

木曾谷に水迸る帰省かな

しばらくは猫が端居に連なれり

かなかなや目を病む夢の恐ろしく

東京 山田 正子

睡蓮や塵さへ近付けぬ白さ

三姉妹に月下美人の咲く一と夜

うすものや身を抜けてゆく波の音

纏れたる糸をほぐすや走り梅雨

船に積む牛と自転車秋の雲

直方 石橋 幾代

踊の輪二人抜くれば歪みけり

新聞を丸めて蠅を不意討ちす

巻きあげてなかなか脱げぬ汗のシャツ

鶏小屋に真白き抜け羽梅雨あがる

紫陽花を切る新しき芽を残し

長崎 松尾 龍之介

万緑や鳥居の上の石つづて

流木をモーセの杖に海開き

トレニアの呱呱の声聞く夏の朝

熊蟬のいけしやあしやあと他を圧す

新服に大きな染みを青時雨

福岡 田代 貞香

初夏や京の晩鐘山渡る

相続の山荒れ果てて露結ぶ

夫といふ明りを亡くし星祭

早梅雨飛石白く暮れゆけり

夕立来て軒下を借る縁かな

空集抄  
柴田佐知子抽出

水底のあめんぼの影丸四つ

岸 洋子

わが身とも思へぬ老いの裸かな

角野良生

日盛りや午睡のごとき村ひとつ

高倉和子

目高三匹生まれてすぐにはじけ合ふ

戸栗末廣

仏壇の闇の深まる法師蟬

曾根富久恵

吊し鮭映る框に名刺置く

中田みなみ

薔薇園を看板女優のごとあゆむ

吉田 菫

揚舟の木釘より朽ち夏の月

深川淑枝



ダービーの人ごみ獣めくにほひ

坂口晴子

しんがりの競渡もつとも權しづき

〃

走馬燈水なき川の流れ初む

松田明子

心底の懺悔ためらふ遠花火

林 徹也

巢立ちたる燕が戻る二度三度

石橋幾代

体型をすつぽり隠すあつぱつぱ

河原敬子

子の電話母の日だからとだけ言ひて

青木朋子

白緋四角四面に吊るさるる

原 友子

パナマ帽似合ふ男となりにけり

永淵恵子

騎馬戦に巴御前や青嵐

山内 碧

梅の実の完熟の香となりにけり

岩下きぬ代

蝙蝠の閃き風の風見鶏

田岡千章

朝蟬の明るくしたる一軒家

森田明成

花火果て囚徒のごとく人動く

えとう樹里

水槽のかたち泳ぐ金魚かな

山本則男

宅配の再配達に麦茶出す

宮川正彦

一睡のあとの六甲男梅雨

大西乃子

殉教碑までの湯けむり夏うぐひす

三井所美智子

もて余すかるき恙と大き梨

田代民子

秋うらら滞空時間の長き四股

苑実耶

通じ合ひ道譲り合ふ蛇と我

小林朱夏

はらからは住所が呼び名夏椿

田中とし江

金魚すくひ追はれて端へ横泳ぎ

秋千晴

母の日の厨に人手余りけり

田代貞香

夏の月夜目にもひかる貝鉤

星加鷹彦

良妻に戻りてまづは髪洗ふ

吉田悦子





水着つけマネキン楽しさうに見ゆ

今井康子

光りつつ風が風追ふ麦の秋

遠山のり子

熱帯夜生者も死者も寡黙なり

押田裕見子

月光の左肩より湯を浴ぶる

あさなが捷

献杯のビールが揃ふ同期会

佐藤和弘

ゆるやかな背泳ぎ鳥になる気分

松井順子

黒揚羽家紋のごとく飛びにけり

倉智万数雄

雪溪を横切る靴の軋みけり

田口萬智子

釣れぬとは言はず居らぬと青葉潮

児玉充代

すつと来てひらひら踊る老婆かな

石川子熊

汗しつつ半衿付くる喪服かな

西住三恵子

新任の教師てこずるからすの子

小島翠波

## 空集作品評

柴田佐知子

### 吊し鮭映る框に名刺置く

中田みなみ

長い年月、光沢が出るほどに拭き込まれてきた上がり框であろう。〈吊し鮭映る框〉だけでも十分に眼の効いた把握である。しかしみなさんはまだ眼を離さず、〈名刺置く〉という一瞬を句の中に織り込む。古い家屋の静かな空間が〈名刺置く〉という一点へと絞り込まれ一筋の風の如き生気が吹き入れられる。

### 薔薇園を看板女優のごとあゆむ

吉田 菫

〈看板女優のごとあゆむ〉は薔薇園がふさわしい。薔薇の豪華な美しさや香りが充分に伝わってくる。花盛りでも躑躅やコスモスでは看板女優の気分にはならないように思う。それにしても何とも言えない可笑しさが湧いてくる。薔薇に酔いながらゆっくりと歩く女性とは若い方ではないだろう。なにしろ今では余り聞く



ことのない〈看板女優〉という言葉が浮かぶ世代なのだから。馥郁たるユーモアに満ちた作品である。

### しんがりの競渡もつとも權しぶき

坂口 晴子

夏の季語「競渡(けいと)」は中国由来のボートレースで江戸時代には各地に広がったそうだ。呼称も異なる。中でも長崎で行われるペーロンが有名だ。細身の舟に漕ぎ手や舵取り、太鼓、銅鐸打ちなど約三十人程が乗り競う。長崎在住の晴子さんは毎年優れたペーロンの句を詠まれている。さて掲句、しんがりがへもつとも權しぶきを上げていて…この一点だけで、追いつこうと懸命に權で水を掻いている漕ぎ手達の力のこもった姿が想像される。遅れていることで、太鼓や銅鐸の音に合わせ揃えて水を掻く權に乱れが生じへもつとも權しぶきとなったのかもしれない。疾走する競渡の臨場感あふれる作品である。

# 空集

柴田佐知子選



子の家は落ち着けぬものは葉に  
定刻の病院食や日の永き  
福岡 角野良生

烏賊捌く目玉の桶と墨の桶  
肋また頸となりぬ更衣

つくづくと只の老人麦は穂に

わが身とも思へぬ老いの裸かな

火の国に牛のかたまる晩夏かな

日盛りや午睡のごとき村ひとつ

同じ皿ばかりを使ふ暑気中り

呼びに行くまでに半分消ゆる虹

体ごと波にまかせて箱眼鏡

何となく見てゐる夜の金魚かな

目高三匹生まれてすぐにはじけ合ふ

青葡萄一つぶ一つぶ張り合へる

しつかりと牛を濡らしぬ夏の雨

広島 戸栗末廣

福岡 高倉和子

鰻屋の洗ひ場見えて梅雨晴間  
福岡 岸 洋子

水底のあめんぼの影丸四つ

掬ひ上げ鯰を扱く南瓜の葉

枇杷を挽ぐ二階より身を乗り出して

位置そのまま夏の火鉢となりにけり

てのひらはやさしき器清水汲む